JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2018年
No. 90
2018年9月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2018 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

全性連・第48回全国性教育研究大会報告 …… 1
思いこみのめがね⑥ …… 10
多様な性のゆくえ⑰ …… 11
性教育の現場を訪ねて⑱ …… 12
今月のブックガイド …… 14
JASEインフォメーション …… 15

■ 全性連・第 48 回全国性教育研究大会報告

「生きる力」を育む性教育を目指して

学校と関係機関が課題を共有し、連携した性教育の実践

はじめに

第 48 回全国性教育研究大会／第 47 回北海道性教育研究大会札幌大会が、８月９日（木曜日）、10 日（金曜日）の両日、全国から 371 名が参加して、北海道札幌市のホテルライフォート札幌で開催された。

大会の基本テーマは「『生きる力』を育む性教育を目指して～学校と関係機関が課題を共有し、連携した性教育の実践～」。

今年度より石川哲也前理事長の後を受け就任した三浦康男全国性教育研究団体連絡協議会（全性連）理事長は、文部科学省から全国の教育委員会に対して発出された通知「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」などを念頭に、「性教育の実践には、『生命尊重』『人間尊重』『男女平等』の精神が必要ですが、時代の変化に即して過去にはなかったインターネットなどに関する課題や、男女というよりは人は皆平等という精神から性的少数者の理解なども重要になっています。このためには、学校だけでなく様々な関係機関との連携が必要であります」と述べた。

三浦康男理事長の開会挨拶

その後、大会実行委員長の蛯名嘉津夫北海道性教育研究会会長・札幌市立柏中学校長は、「北海道での全国大会の開催は 2011 年（平成 23 年）以来となりますが、北海道地区では 10 代での性感染症や人工妊娠中絶の割合が全国平均を大きく上回り憂慮される状況が続いております。さらにどの年齢層においても７～８％はいると言われる性的マイノリティへの理解を深め、学校教育による性の多様性への対応も喫緊の課題

となりつつあります。そのため性教育は学校が担うべきところは担いつつも、社会全体で子どもの発達段階に配慮しながら、学校教育及び関係機関の方々が共通理解をもちながら、意図的・計画的に指導・実践することが大切になってきていると考えております」と、性教育の今日的課題と重要性を語った。

第１日目８月９日（木曜日）

大会第１日目の９日（木）は、午後１時からの開会式行事の後、午後２時より基調講演（横嶋剛氏）、午後３時より記念講演（池田官司氏）が行われた。

◆基調講演
学校における性に関する指導の充実

文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課健康教育調査官／国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官／スポーツ庁政策課教科調査官の横嶋剛氏は、子どもたちがおかれている社会状況を概観し、学校における性に関する指導について講演された。

横嶋氏は、生涯を通じて健康な生活を送る基盤を培うことを目指し、学校における健康教育の推進が重要であると述べ、「とりわけ、性に関しては性情報の氾濫など、子どもたちを取り巻く社会環境が大きく変化してきていることから、子どもたちが性に関して適切に理解し、行動できるようにすることが課題となっています。また、若年層のエイズ及び性感染症や人工妊娠中絶も問題となっています。このため、学校全体で共通理解を図りつつ、体育科、保健体育科などの関連する教科、特別活動等において、発達の段階を踏まえ、心身の発育・発達と健康、性感染症等の予防に関する知識を確実に身に付けること、生命の尊重や自己及び他者の個性を尊重するとともに、相手を思いやり、望ましい人間関係を構築することなどを重視し、相互に関連付けて指導することが重要です。また、子どもたちがこうした課題を乗り越え、生涯にわたって健康で安全な生活や健全な食生活を送ることができるよう、必要な情報を自ら収集し、適切な意思決定や行動選択を行うことができる力を一人一人に育むことが強く求められています」と語り、以下の２点について詳しく解説された。ここでは、その概略を紹介する。

（１）新学習指導要領における性に関する指導

①性に関する指導の位置付け

性に関する指導は、単独の教科で取り扱うものではなく、学校教育全体で推進すべきものであり、また学校だけでなく家庭や地域社会と連携を図りながら推進するものである。

②小学校・中学校・高等学校の体系的な指導

小学校・中学校・高等学校、それぞれ発達段階に応じた内容が体系的に位置づけられており、全体を把握したうえで、見通しをもった指導を行う必要がある。

③各教科、特別活動、総合的な学習の時間等の連携

性に関する指導は、一つの教科のみで行うものではなく、各教科の特質を生かした指導の充実が求められている。また、１回１回の授業で全ての学びが実現されるものではないので、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、どの学年のどの教科等と関連付けて指導を行うのかを考える必要がある。

④集団指導と個別指導

主に集団の場面で、あらかじめ適切な時期・場面で必要な指導・援助を行うガイダンスに加えて、主に個別指導により個々の子どもが抱える課題の解決に向けて指導・援助するカウンセリングを充実させていく視点が必要である。そのため、全教員の共通理解のもと、集団指導で取り扱う内容と個別指導で取り扱う内容をよく整理したうえで、性に関する指導を推進する必要がある。

（２）家庭や地域、保健・医療機関との連携

学校における性に関する指導を充実させるためには、家庭や地域の人々とともに子どもたちを育てていくという視点に立ち、家庭、地域社会、保健・医療機関との連携を深め、学校内外を通じた子どもの生活の充実と活性化を図ることが大切で、学校、家庭、地域等が

それぞれ本来の教育機能を発揮し、全体としてバランスのとれた教育が行われることが重要である。

そのためには、教育活動の計画や実施の場面において、家庭や地域の人々の積極的な協力を得て、教育資源や学習環境を活用する必要がある。家庭や地域社会における子どもの生活の在り方が学校教育にも大きな影響を与えていることを考慮し、地域の人々や子ども向けの学習機会の提供、家庭や地域社会に積極的に働きかけ、それぞれがもつ本来の教育機能が総合的に発揮されることが大切である。

など、具体的な例をあげて50分余りの基調講演を行った。

◆記念講演
性別違和の理解

北海道文教大学人間科学部作業療法学科教授／札幌医科大学附属病院GIDクリニックの池田官司氏は、医療側、精神科医からの見方であると、はじめにことわりながら「性的違和の理解」というテーマで、講演された。

池田氏は、2003年(平成15年)から、札幌医科大学附属病院GIDクリニックの精神科を担当、主に「LGBT」の「T」、つまり「トランスジェンダー」に相当する当事者たちの対応に当たってきている。その経験を中心に、事例、性別違和の概念・疫学、治療・対応の基本、精神科での対応、学校での対応、問題点と課題などについて触れられた。

事例では、当事者たちの声を具体的に紹介している。以下はその一例である。

【FTM・小学校低学年の頃】

・入学するとき、赤いランドセルを背負わされたことに違和感を持った。入学式のときにスカートをはくのがいやで抵抗して親を困らせた。
・祖父母がシルバニアファミリーのセットを買ってくれたり、リカちゃん人形を買ってくれたりしたが、あまり興味を持たなかった。むしろ親にねだって買ってもらった超合金ロボットのほうが好きだった。
・男の子と一緒に野球やサッカーをして遊ぶのが好きだった。
・髪を短くしているほうが好きで、スカートは絶対にはかなかった。だいたいジャージで過ごしていた。しばしば男の子と間違われた。

そのほか、数例の事例を紹介された。性別違和の概念・疫学では、日本精神神経学会の「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン第4版（2012)」について解説し、精神科での対応については、治療の原則を次の様に示している。

・自分の（本人の）望む性として、自分が（本人が）感じる満足度を向上させること。
・本人の決定をできるだけ大事にする。

などをあげ、性自認を身体的な性別に合わせる試みは、効果があがらなかったといい、精神科医は「ゲートキーパー」としての役割を担わざるをえない、「本人の決定」にそえないこともしばしば、しかし、後悔する例を少なくする効果があり、医療の正当性を担保するリスクマネジメントの意味もあると語った。

性別違和を訴える児童生徒への対応については、次のことが重要だという。

①まず受け入れる。

当事者は自分のアイデンティティに疑念をもっている。それを晴らすには他者から承認を受けることが必要である。

②現実的に対応する。

持って生まれた身体的条件は変えようがない。当事者たちの相談にのるときにも、それぞれが与えられた条件の中で、どう自分らしく生活していくのかという現実的な落としどころ見いだしていくような視点があるとよい。

③未来のことを一緒に考える。

「人に迷惑さえかけなければ、自分らしく、やりたいようにやってよい」このようなメッセージを送り続ける。あくまでも「自分らしく」ということがキーワードだろうが、これほどわかりにくいこともないかも

しれない。試行錯誤を応援していくようにしたい。

池田氏は、抄録集の「おわりに」で、「性同一性障害の人々は、独特の人間的魅力を備えている方が多い。人生の早い時期から自分自身のあり方を見つめ、周りの人々と自分自身を比較し、自問自答を繰り返さざるをえないからなのだろうか。当事者の方たちに触れることは私自身も少しだけ豊かな気持ちにさせてもらっているような気がしている」と記している。

90 分の記念講演終了後、午後５時より会場をホテルの 17 階に移し、懇親会が開かれた。

第２日目８月 10 日（金曜日）

大会２日目の９日(金曜日)は、午前９時 30 分から 12 時まで、５つの会場に分かれて分科会が、午後は昼食時間をはさんで、午後１時 15 分から３時 45 分まで、同じく５会場で課題別講座が開かれた。

ここでは、分科会のテーマ・発表者、課題別講座のテーマと講師及び講演の要旨を紹介する。

なお、第２分科会「中学校における性教育の実践」および課題別講座Ｉについては、６ページ以降でその詳細をレポートする。(以下敬称略)

分科会(第１～第５分科会)

◆第１分科会「小学校における性教育の実践」

テーマ１：小学校における性教育の実践「心の救急箱を作ろう」
～心の救急箱を作る活動を通して、悩みや不安な気持ちへの対処の方法を考える学習～

発表者：渡邊裕治（北海道札幌市立幌南小学校教諭）

テーマ２：健康な生活を実践する資質や能力を育成していくためのカリキュラム開発
～体育科保健領域の学習を通して～

発表者：吉田光男（東京都練馬区立田柄第二小学校主幹教諭）

◆第２分科会「中学校における性教育の実践」

テーマ１：中学校における性教育の実践
～関係機関との連携を通して～

発表者：片野　恵（北海道札幌市立陵陽中学校教諭）

テーマ２：学校全体で取り組む性に関する指導の実践

発表者：堤　希（北海道余市町立旭中学校養護教諭）

分科会及び課題別講座の様子

※第２分科会の発表については、６ページ以降で詳細をレポート。

◆第３分科会「高等学校における性教育の実践」

テーマ１：いのちを考える学習
～生と性を考えるカフェテリア～

発表者：渡辺千鶴（北海道札幌市立札幌開成中等教育学校養護教諭）

テーマ２：「性の指導」から「性の学習」へ
～続ける・つなげる中標津高校の性教育～

発表者：丸田智江（北海道中標津高等学校養護教諭）

◆第４分科会「特別支援学級・学校における性教育の実践」

テーマ１：KOKOKARA で学ぶみなみの杜の性教育

発表者：西野昭子（北海道札幌市立札幌みなみの杜高等支援学校養護教諭）

テーマ２：特別支援学校における性教育の実践
～岡山県特別支援学校教育研究会健康教育部会の研究に関連して～

発表者：富野美由紀（岡山県立岡山南支援学校養護教諭）
猪原佳織（岡山県立岡山南支援学校教諭）

◆第５分科会「性教育の課題について様々な立場からの取組」

テーマ１：ライフプランとしての妊娠と出産を考える

～若年妊産婦の現状と課題～
発表者：横田華奈子（北海道札幌市東区保健福祉部保健師）
テーマ２：SNS 等に起因する少年の福祉犯被害の現状とその対応
発表者：大川善照（北海道警察本部生活安全部少年課課長補佐）

課題別講座（課題別講座Ⅰ～Ⅴ）

◆課題別講座Ⅰ
テーマ：性教育を学校全体の教育活動として進めるために
講師：堀内比佐子（全国性教育研究団体連絡協議会事務局長）
※課題別講座Ⅰの講演内容については、８ページ以降で詳細をレポート。

◆課題別講座Ⅱ
テーマ：知っていますか？　デート DV
講師：須藤陽子（北海道札幌市市民文化局市民生活部男女共同参画室男女共同参画課課長）

デート DV と呼ばれる若いカップルの間で起こっている暴力は、将来、深刻な夫婦間の DV につながる可能性が高く、防止策が急がれている。周りに助けを求めるという行為は大人でも勇気のいることで、勇気を出して助けを求めてきた被害者に対して適切な支援をするためには、対応する側がデート DV について学び、深く理解することが必要である。

対応する側が、すべて一人で抱え込んでしまうことのないよう、デート DV に対して共通理解をもって組織的に対応し、日頃から専門機関と連携してサポートを行う体制づくりを心がけておくことが重要である、という。

◆課題別講座Ⅲ
テーマ：助産師が育む「性」と「いのち」の話
講師：髙室典子（一般社団法人北海道助産師会会長）

助産師は、各ライフステージにおいて「性」や「いのちの大切さ」と向き合う職業。北海道助産師会では、小・中学校や高校などの生徒や父母会向けの依頼を受けて年間100件ほどの「いのちの出前講座」を行っている。

いのちに寄り添い、多くの命の誕生を見守ってきた助産師が、見て、触れ合って、感じたままを伝える「いのちの現場」からのメッセージを語った。

◆課題別講座Ⅳ
テーマ：思春期の教育と医療の連携
講師：藤井美穂（カレスサッポロ時計台記念病院・女性総合診療センター長）

思春期は、幼児期から続く心身の成長に加え、成熟というダイナミックな変化が開始されるきわめて重要な時期。思春期の年代に自己肯定感が形成されないと、学業や仕事が長続きしなないため自暴自棄になったり、自分で抑制できない行動に出てしまうことがあるという、幼児期から思春期まで豊かな自尊感情を育てるための教育と医療の連携のあり方について語り合った。

◆課題別講座Ⅴ
テーマ：シンポジウム「性的マイノリティについて」
コーディネーター：遠藤俊明（札幌医科大学産婦人科・時計台記念病院）
〔シンポジスト〕
国見亮佑（北海道帯広市在住・ゲイ当事者・にじいろほっかいどう事務局長・公立学校教諭）
真田　陽（北海道網走市在住・FTM 当事者・公立学校教諭）
日野由美（北海道札幌市在住・MTF 当事者・性同一性障害学会会員・stn21 性的少数者教職員ネット会員）
柳谷由美（北海道札幌市在住・レズビアン当事者・にじいろほっかいどう理事長・さっぽろレニンボープライド実行委員長）

シンポジストそれぞれが、ライフストーリーを語ってくれた。シンポジストの方々は、LGBT の当事者であり、しかも自身が教師あるいは社会活動に熱心な方々であることが、本シンポジウムの特徴で、セクシュアルマイノリティを理解するうえで、きわめて貴重な機会となった。また、追加発言として、札幌市市民文化局男女共同参画室の吉田巨人氏から「札幌市パートナーシップ宣言制度」についての説明があった。

多様性に富んだプログラムの第 48 回全国性教育研究大会は、５つの課題別講座で終了した。

次回、第 49 回全国性教育研究大会／第 29 回関東甲信越静性教育研究大会は、2019 年８月８日（木曜日）、９日（金曜日）の２日間、千葉県千葉市で開催される。

（取材・文　編集工房一生社／齋田和男）

■ 第２分科会「中学校における性教育の実践」

発表①「中学校における性教育の実践～関係機関との連携を通して～」

発表②「学校全体で取り組む性に関する指導の実践」

●発表①

テーマ：**中学校における性教育の実践**
～関係機関との連携を通して～」

発表者：片野恵（札幌市立陵陽中学校教諭）

片野恵教諭は、札幌市立柏中学校、札幌市立白石中学校を経て札幌市立陵陽中学校に赴任した。学校ぐるみで性教育に取り組む柏中学校の学びをベースに、自分が担当する「保健体育」と絡めてどのような性教育ができるのかを考え、３年間を通して「いのちを考える学習」を実践するに至ったという。そこには、「人との関わりを理解し、自分自身を大切にしながら他人をも大切にする心を育てたい」という思いがあったと語る。

１年次の指導計画は「生殖機能の成熟」「性とどう向き合うか」など保健の授業をベースに、道徳の時間を使って①「生命誕生」～私の地球デビュー～②「私のたからもの」「たからもの」（忘れられない出来事やそれにまつわる大切なたからものを探す）の発表から人との関わりを考え、人との関わりのあるものが大切なたからものになることに気づくという流れをつくった。助産師を講師に招いて「いのち～自分を大切に、相手を大切に～」というテーマで道徳講演会も行った。「生命誕生～私の地球デビュー～」の授業では、自分の成長の記録を調べ記入することと、保護者からは誕生時の様子や命名の由来などのアンケートをとり、生徒はそれを読んで保護者へのメッセージを書くといった展開ですすめている。

「さまざまな家庭の事情があることから、生い立ちを振り返る授業については賛否両論があるが、この学びが生徒にとってもそのご家庭にとってもつらいことのないように、またその後問題がないようにと、細心の注意を払って取り組ませていただいている」と語る。

２年次は、「食、いのちと環境を考える学習」をテーマに、宿泊学習を行った。田植え体験や旭山動物園

での「いのちの学習」、富良野自然塾では「地球といのちの学習」を行った。さらに「いのちを考える」をテーマに講師を札幌市若者支援総合センター勤務元中学校教師に依頼し道徳講演会を行った。

３年次は道徳で「友情と恋愛、望ましい男女の人間関係」を、保健では「性感染症とその予防／エイズ」の授業を行った。また、「これからの自分」というテーマで行った授業では、卒業の年であることから自分史を作成し人生設計を考えるという流れですすめた。いのちの授業の中で救急救命講習も行った。

以上が３年間の取り組みの概要である。性教育の実施にあたっては、学年・学校における共通理解と連携をすすめ、時間をやりくりしながら性教育の取り組みをすすめていると語る。

ほかにも、思春期ヘルス授業ケア事業（保健センター）や産婦人科医師派遣事業（市教育委員会）など外部機関との連携を行い、また保護者ともできるかぎり密に連絡を取ることを心がけているという。

最後に、柏中学校時代から９年間取り組んでいる性教育だが「柏中学の卒業生から助産師になった子や研修医として来年小児科医になる子などがいて、中学時代の性教育の学びが自分のベースになっているといってくれた。生きることは人とのつながり、関わりであるということを今後も子どもたちに教えていきたい。

微力ではあるが、がんばっていのちの授業に取り組んでいきたいと思う」と締めくくった。

●発表②

テーマ：**学校全体で取り組む性に関する指導の実践**

発表者：堤 希（北海道余市町立旭中学校養護教諭）

次に北海道余市町立旭中学校堤希養護教諭からの実践報告があった。堤養護教諭は「本校は心のある挨拶や時間厳守など礼節を大切にしているが、ここ数年、子どもたちの抱える性の諸問題に直面したことが、学校全体で性に関する指導に取り組むきっかけになった」と語る。

取り組みの実際については、全職員の共通理解を目的に養護教諭がコーディネーター役となり、年度はじめの研修で全体計画、指導内容や時数を確認。年度末には反省を行い、次年度の内容や教材の検討にあたっているという。

全体計画と年間計画は心身の発育・発達や男女の特性を理解し、お互いの人格を尊重することをねらいとしている。また、指導計画は、1年生で学んだことが次年につながり広がりを持たせることに留意して作成しているという。

実施にあたっては、全教職員で協力しあって指導にあたり、集団指導はもちろん個人指導が必要な場合は、そのときに適したメンバーであたるようにしているという。指導の留意点としては、①発達段階に応じた指導を心がけ、アンケートで生徒の実態を把握する、②系統立てた指導計画、③教職員の共通理解と協力体制、④保護者との連携（性教育の通信の発行、参観の案内など）などをあげている。

また、題材に応じてソーシャルスキルトレーニングを取り入れたり、情報モラル教室では外部講師を招き、学年の理解度や発達段階に応じて行っていると述べた。

これまで3年間取り組んできた成果については「授業後に実施しているアンケート結果から大きな変容はみられないが、生徒の意識がかわりはじめていることが感じられる」と語る。また、授業の学びから生徒がネットトラブルに巻き込まれそうになっている危険に気づき、教師に相談。事前にトラブルを食い止めた事例もあるという。

今後の課題として「各教科との関連をより深く考え、性に関する指導の全体計画の見直しを図っていくこと。また新しい情報や知識、生徒の変化に柔軟に対応していくこと」などをあげる。

「これからも指導内容を精選し、限られた時間の中で生徒が必要な知識・態度を習得するよう学校全体で取り組んでいきたい」と実践報告を結んだ。

●グループ討議

実践報告の発表後は発表者への質疑応答があり、続いて参加者の間でグループ討議が行われた。テーマは「それぞれの立場から性教育を推進するうえで課題になること」、「その課題につながる解決策について」の2点。参加者はグループにわかれそれぞれ活発な意見が交わされた。

討議内容だが、各グループを代表して以下のような報告があった。「性教育を推進するうえでの課題については『小学校と中学校のつながりをどう考えるか』『時間の確保が難しいがどの時間でとれるのか』『クラスに必ず性的マイノリティの子どもがいるが、その中で多様性の授業をどのような配慮をもってすすめていけばよいのか』などがあがった」という。

「性教育は大きな話題になっているのに、なかなか授業の優先順位が上がらない。教育行政が性教育を進めようといってくれると優先順位があがるということがあって、そこはぜひ国も教育委員会も意識してほしい」と述べた。

●助言者からひとこと

最後に助言者の三浦康男全国性教育団体連絡協議会理事長からは「学校での性教育は発達段階に応じた指導、系統的な指導、教職員の共通理解が大事だが、おふたりの先生方の報告では、まさにこのことを実践されていた。今の学校の実践はもちろん、ほかの学校にうつられても何らかの形で性教育の実践の中心になってご活躍いただければありがたいと思う」。

「性教育は、行政が取り組むと学校の現場では指導しやすいと痛感している。校長からも行政に『性教育は大切だから推進できるように現場に積極的に働きかけていただけないか』ということを言っていくのも一つの方法だと思う」。

など多くのご示唆とご助言をいただいた。

（取材・文　中出三重／エム・シー・プレス）

■課題別講座Ⅰ

「性教育を学校全体の教育活動として進めるために」

講　師：堀内比佐子（全国性教育研究団体連絡協議会事務局長）

児童生徒を取り巻く性にかかわる課題は教育現場に次々と課せられてくるが、現場ではその必要性を感じながらも実践が不十分と思われる現状があるとし、堀内氏は「性教育を学校全体の教育活動として進めるために」をテーマに講演を行った。

また、講座後半では、それぞれの参加者の抱えている問題を話し合う参加型の講座になるようグループワークも行われた。

●性教育実践の本来の形

堀内氏は「最近の学校での性教育は、養護教諭か保健体育の教諭が行うもの、また外部指導者を招聘して行うものと思われている」と語る。しかし、昭和47年『東京都中学校性教育研究会』が設立されたときの趣旨は、学校がすべての教師による組織的・計画的な教育活動として性教育を実施するには、どのようすればよいかというものであった。

国語の先生、社会科の先生、保健体育の先生と担当教科にとらわれず先生方が集まって性教育研究会を立ち上げたという。

また学校での性教育の課題の取り組みについては、「時代の流れの中で今日的な課題の取り組みをすることは必要である。たとえば、かつてはエイズが、その後は人工妊娠中絶の問題、クラミジアをはじめ性感染症が女子高生の間でかなり流行ってきたときには性感染症の課題に取り組んだ。また３、４年前は、妊孕性の問題が話題になり、卵の老化が取り沙汰され、今は、LGBTという言葉がさまざまな場所・場面でつかわれ話題になっている。時代に即したテーマを取り上げ、子どもたちにどのように指導していったらよいか考えていくことはとても大事なことである」としながらも、「今日的な課題を追いかけるだけの性教育に終わらず、もっと不易なテーマに取り組む姿勢を忘れてはならない」と述べた。

●人間の性のとらえかた

堀内氏は「性教育にかかわろうと思っている人または現場の先生方は、まず最初にセクシャリティの概念をしっかり押さえ、人間の性とは何かをきちんととらえていく必要がある」と強調する。

古い時代には、『性』を男と女、あるいは性器やそれにかかわる行為としてとらえていたが、現在はセクシャリティという概念でとらえていくことが一般化されている。セクシャリティは、人格と人格の触れ合いのすべてを包含するような幅広い性概念で、人間の体の一部としての性器や性行動のほかに他人との人間的なつながりや愛情、友情、融和感、思いやりや包容力など、およそ人間関係における社会的、心理的側面やその背景にある生育環境などもすべて含まれるという大きな概念で性をとらえるものだという。

「『人間の性は多様であるが、すべての人が人間として尊重されなければならない』という基本理念を正しく認識していれば、性的マイノリティの人々への理解や受け入れを自然にすることが可能である」と述べた。

●学校における性教育の現状

学校教育の究極の目標は、人格の完成と豊かな人間形成であり、そのためには性の教育、性の指導は欠かせないものであると堀内氏は語る。しかし、学校の現況ではなかなか思うように性の教育、性の指導が進められていない。

その理由として、「やらなければならない教材研究、日常の事務作業、保護者への対応など、現場は大変忙しくさまざまな課題が学校には課せられている。性教育も大事だと思うが、日々、目先の課題がたくさんある。性教育などやっていられない」という教員が多くいる。

教員を対象にした調査で、性に関する指導は必要かという問いに「はい」という回答はかなり高く、「必

要だができない」という回答を含めると99%近くある。できない理由として、挙げられものに、「指導方法がわからない」という回答が多い。「実践したいが「時間的な確保がむずかしい」という理由もあげられているという。

「これらを踏まえながらもう一度学校教育の現状について考えてみたい」と堀内氏は語る。

「指導方法がわからないということに関しては、教科には、それぞれ学習指導要領があって、具体的な解説書もあるが、性に関する指導に関しては、まとまった記載や指導体系は示されていないのが現状である。このことが学校現場での指導をあいまいにし、日本の性教育の遅れや定着しない原因につながっている。

発達に応じた指導計画、指導内容、指導方法の工夫。また、各学年、学級間での相互理解や連携が必要である。第2分科会で発表された札幌市立陵陽中学校、北海道余市町立旭中学校では、これらのことがうまく実践されていた。しかし残念ながら、ここまできちんとできているところは、少ないのが現状ではないだろうか」と述べた。

性教育の年間計画や指導内容を作成するのは、大変なことだが、「一度指導計画を作成すると、毎年現状に応じて内容を見直していくかたちですむ。しっかりした土台さえできれば、その後もずっと使っていける」という。

●明確な根拠性のある性教育を

では、どのようにして「性に関する指導」の学習指導案を作成していけばよいのか。堀内氏は抄録集に「各教科、道徳科、特別活動等に散りばめられている性に関する内容を横断的に、学年を縦断的にクロスし、発達段階を踏まえ、体系的に全体の指導計画を作成することが望ましい」と記し、「学校で行う性に関する指導（性教育）は、指導の根拠が明確でなければならない」と強調する。

「行き過ぎた指導」という理由で、性教育バッシングがときどき起きるが、その指導の根拠が明確でないためにバッシングを受けるのである、と語る。

「かつて日本性教育協会から出された『性教育指導要項解説書』があり、参考にしながら勉強させていただいた。学校で性教育を行う場合どのような内容が必要かということが細かく書かれ、学校における性教育の系統的な指導書だった。また平成11年に当時の文部省から出された『学校における性教育の考え方・進め方』も全体を見通した中で、学校における性教育について書かれている。20年近く前に出されたものなので、時代に即さない部分もあるが、人間の性のとらえ方や学校における目標など、基本的なことにそう大きな変更はない。現在も学校現場での指針になっている」と語る。

平成25年文部科学省から出された『生きる力を育む小学校（中学校）保健教育の手引き』に体育・保健分野での指導や学級活動での指導事例が示されているが、性に関する指導の全体的な目的などにはあまり触れられてはいない。中学校の「学習指導要領解説 保健体育」のところにも性の成熟として指導内容がでているが、これについても同様であるという。

堀内氏は同じく抄録集で、平成11年に当時の文部省から出された『学校における性教育の考え方・進め方』から、性教育の具体的な目標を紹介している。

人格の完成と豊かな人間形成を究極の目的とし、人間の性を人格の基本的な部分として、生理的側面、心理的側面、社会的側面などから総合的にとらえ、科学的知識を与えるとともに児童生徒が生命尊重、人間尊重、男女平等の精神に基づく正しい男性観や女性観をもつことによって、自ら考え、判断し、意思決定の能力を身に付け、望ましい行動を取れるようにする。

上記目標を踏まえ、学校における性教育の具体的な目標を次のように設定している。

①男性又は女性としての自己の認識を確かにさせる。
②人間尊重、男女平等に精神に基づく豊かな男女の人間関係を築くことができるようにする。
③家族や様々な社会集団の一員として直面する性の諸問題を適切に判断し、対処する能力や資質を育てる。

「この手引きができて20年近く経過し、ジェンダーセクシュアリティ時代にそぐわない表現もみられるが『人間の性』が人格の根源にあり、自己の性の自認が生き方を左右すること、社会生活において人との関わりが重要であることや社会の一員としての役割や責任があることにかわりはない」という。

「これらのことを踏まえたうえで、学校全体で性教育に取り組むためにはどうするか―残りの時間を参加者同士グループで討議してほしい」と話しを結んだ。

（取材・文　中出三重／エム・シー・プレス）

思いこみの曲がね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義　Suzuki Shigeyoshi

公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。
専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

第6回
「嫌われる勇気」
退職の覚悟とカミングアウト

私は、できれば人から嫌われたくないと思っていました。学校でかかわる子どもたちからも、できれば好かれていたいと思っていました。保護者からも、「シゲせんせーはいい先生」と思われたかったです。同僚の先生からも、「シゲせんせーはとても仕事ができる先生」と思われたいと願っていました。「自分がどうありたいか」よりも、「他者からどう見られたいか」を優先させていました。自分の中に軸はなく、他者の中に軸があった気がします。

教師としての仕事も「嫌われないように、嫌われないように」取り組んでいた時期もありました。「本当は毅然とした態度でかかわる必要があるけど、子どもに嫌われたくないからここは優しく対応しよう」とか、「保護者に本音を伝えたいけど、ウケのいい先生の評価を得るためにここは黙っておこう」と。子どもや保護者など、人から嫌われないことで自分の承認欲求を満たしていたのかもしれません。

今から３年前の８月、私は教育委員会の公募説明会に出席しました。公立小学校の教員は定期的に勤務する学校が変わる「異動」があります。教員の公募は、ある程度自分の希望する地区へ異動するチャンスがあります。そのとき私は、ある地区の小学校に勤務して４年目でした。同じ地区に残り管理職や教育委員会の指導主事を目指すのか、心機一転異動して担任を続けるのか悩んでいました。公募説明会は大変興味深いものでしたが、心が動かなかったのです。説明会の帰り道、私はふと立ち止まりました。頭にこんなことがよぎったのです。「退職…してみようかな」。

仕事が忙しくて「あー、先生を辞めたい」と思ったことはありましたが、これまで本気になることはありませんでした。しかし公募説明会の帰り道で「退職」が頭をよぎって以来、心の片隅にいつもそのことがありました。

そんなことを考えながら、私はその時期、ある本を読んでいました。それはベストセラーになった『嫌われる勇気』(岸見一郎・古賀史健著）です。そのとき置かれている自分の状況とアドラー心理学の教えが合っているように感じ、食い入るように本を読みました。

さらにそのタイミングで、今度はカミングアウトフォトプロジェクトについても知ることになりました。LGBT当事者であることを、写真を通してカミングアウトする人々の姿に考えさせられました。

先月のコラムでも書いたように、このときの私は、クラスの子どもとのかかわりに自己矛盾を抱えていました。公募説明会、退職の２文字、嫌われる勇気、クラスの子どもたち。様々な考えが頭と心の中で渦巻いていました。「生き方に多少の不都合があっても、このまま変わらずに生きていくのか。ゲイであることは黙っておくのか。忙しい忙しいと文句を言いながら、教員を続けていくのか。子どもや保護者に愛想笑いを振りまいて、人から嫌われない人生を送るのか」「リスクを冒してでも、自分で判断し行動し自分の人生を生きていくのか。他者の軸から自分の軸に、人生を取り戻すのか」そんなことを考えていました。

いろいろな迷いと揺れの中で、私は正規の小学校の先生を退職しました。そして、自らのこともカミングアウトしました。37歳になって、ようやく自分で判断し行動することができた気がしました。それまで子どもたちには「よく考えて行動しなさい！」って言ってたくせに（笑）。

あのときの退職とカミングアウトの決断が正しかったかどうかは、いまだにわかりません。それについて周りの人からはいろいろな反応やフィードバックがありました。私を嫌い、離れていった人もいました。自ら進んで嫌われたいわけではないけれど、他者の評価よりも大事なことがあることがわかりました。実感しました。周りの方のお気遣いやアドバイスを大事にしながらも、「私が考えて決めて行動した」ことが大事でした。

「嫌われる勇気」久しぶりに読んでみようかな。いや。続編の「幸せになる勇気」の方かな。

多様な性のゆくえ

One side／No side［17］

宮田 一雄

みやた　かずお

ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

夫婦善哉か女夫饅頭か

根が保守的なせいか、いつもそこにあるものがなくなるとどうも落ち着かない。鎌倉に引っ越して12年目の夏、JR鎌倉駅の東口から若宮大路に突き当たる交差点で、あれ？　と思う。いつもお饅頭を売っている『松風堂』がシャッターをおろしたままではないか。最高気温35度を超える猛暑の中、汗をぬぐってお店の前に近づくと、シャッターには『甚乍勝手』と題した小さな張り紙。

『百余年に渡り御愛顧賜りましたが この程諸事情により平成三十年六月二十六日をもちまして閉店させていただきました』

そうでしたか……。真向かいにある書店に行くため、この交差点は何度も渡っている。松風堂の『女夫饅頭』が鎌倉名物のひとつであることも知っていた。個人的には甘党でもある。

ただし、12年も鎌倉に住んでいながらその『女夫饅頭』を買い求めたことは3回、いや2回くらいだったかな。すいません。

お店は閉じてしまったが、松風堂本廛（しょうふうどうほんてん）の重厚な看板やその脇の『女夫饅頭』と書かれた赤い提灯はまだ残っていた。閉店したと知ったとたん、急にかけがえのないものを失ったような気分になり、あわてて提灯の写真を撮る。

いつまでもあると思うな『女夫饅頭』などと炎暑の中で勝手な感慨にふけったりもする。ま、恥をしのんで告白すれば、長い間、『女夫饅頭』は「めふまんじゅう」と読むものだと思い込んで、疑いもしなかったのだけど……。

「女夫は、めおと、と読むんですよ」

3年ほど前にそう教えてくれたのは、産経新聞で同僚だった清湖口敏論説委員である。長く校閲記者として活躍し、日本語に関する知識の深さと視野の広さは人並みどころか、記者としても並み外れている。

そうか、「めおと」といえば、織田作之助の名作『夫婦善哉』を引き出すまでもなく、「夫婦」と書くものだと思っていたが、それはおじさんの勝手な思い込みだった。考えてみれば、「夫婦」をどうして「めおと」と読むのか。こちらの方がむしろ無理があるというべきだろう。どう逆立ちすれば「夫」が「め」と読める？

それに比べれば「女」はそもそも「女狐」……じゃなかった、「女神」の「め」である。「夫」も小さな「っ」を一つ跳ばせば「めおと」とすんなり読める。

老舗・松風堂の閉店は残念だが、調べてみると「女夫饅頭」を販売しているお店はまだ他にもあった。鎌倉では長谷寺門前の恵比須屋。店頭に『古代黒餡女夫満んぢう』の看板がある。お隣の江ノ島では参道に2店、そして島の奥にある中村屋羊羹店でも、茶色と白で一対となったお饅頭が売られている。お土産にいくつか買って帰ると、「古都鎌倉と名勝江の島 結ぶ味」として名物の由来が説明されていた。

『女夫饅頭の起源は古く昔、鶴岡八幡宮境内、白旗神社の社前に「女夫石」と呼ばれた不思議な石がありました。この石は源義経と静御前の睦まじさを物語ったものと言い伝えられて居ります』

もとは「女夫石」のようだ。

一方で、奈良県桜井市観光協会の公式サイトには、江戸時代に親しまれた伊勢本街道名物「女夫饅頭」が復刻されたというニュースも紹介されている。さらにネットで「女夫」を検索すると、栃木県には女夫淵温泉（めおとぶちおんせん）、島根県には女夫岩遺跡（めおといわいせき）もある。「女夫」は意外にポピュラーなようだ。こうなればジェンダー的な考察にも踏み込みたいところだが、浅学非才の身で無理をするとたちまちボロが出そうな予感もする。

ここはとりあえず、「めおと」といっても「夫婦」とは限らない、「女夫」もありうるということをお伝えしておこう。それどころか「夫婦」を「めおと」と読むことが定着している社会ならば、「夫夫」もまた十分に「めおと」と読める。だから何だと突っ込まれると、うろたえてしまうが、少なくとも情報提供の価値はあるはずだ。饅頭以上に、自分に甘党のおじさんとしては、ひそかにそう言い聞かせて納得したい。

［福岡県遠賀郡岡垣町立岡垣東中学校］（下）

生徒の興味・関心を引き出す学習指導の工夫

岡垣町立岡垣東中学校は教職員全員で健康教育（性教育・薬物乱用防止教育）に取り組み、指導内容によって学年ごと、学級ごと、ときには男女別という形態で授業を実践しているという。効果的に生徒たちに伝えるにはどのような工夫が必要だろうか。今回は、岡垣東中学校の健康教育の中心を担う白石芳美養護教諭の授業の実践内容を紹介する。

視覚に訴える授業

限られた時間の中で、健康教育（性教育・薬物乱用防止教育）を効果的にわかりやすく、そして生徒たちが興味・関心をもって取り組めるようにするには、どうしたらよいか。

白石芳美養護教諭が意識的に取り組んでいるのは五感に訴える授業だという。

なかでも主眼を置いているのが視覚に訴える授業。「耳で聞くだけの授業より、子どもたちの印象に残りやすいのです」と白石養護教諭。

事前アンケートで生徒たちの知識や理解度を把握したうえで、教材や教具、資料を工夫したり、また板書計画も入念にたてるという。

たとえば、去年はこんな工夫をしたそうだ。

「エイズの学習は小学校６年生の保健体育の授業で学習しているはずなのですが、１年生の事前アンケートをみると、知識が残っている生徒は半分以下の47％しかいない。『そもそもエイズって何？』といった回答もありました」

せっかく学んでもすぐに忘れて知識がつながっていかない。体系的に学びを深めるにはどうしたらいいのか考えた。

「子どもたちは、言葉で覚えていなくても絵で覚えていることが多いのです。

そこで、まずは板書で説明する白血球のキャラクターを小学校、中学校で同じものにして登場させた。

具体的には生徒たちに「最初にテストをしてみよう。白血球はどんな仕事をするんだっけ？　ジャ、ジャーン」と言いながら白血球のキャラクターを見せるそうだ。

岡垣町立岡垣東中学校　校長・中尾　真己都
生徒数 436 名
教職員数 28 名
（2018 年 7 月現在）

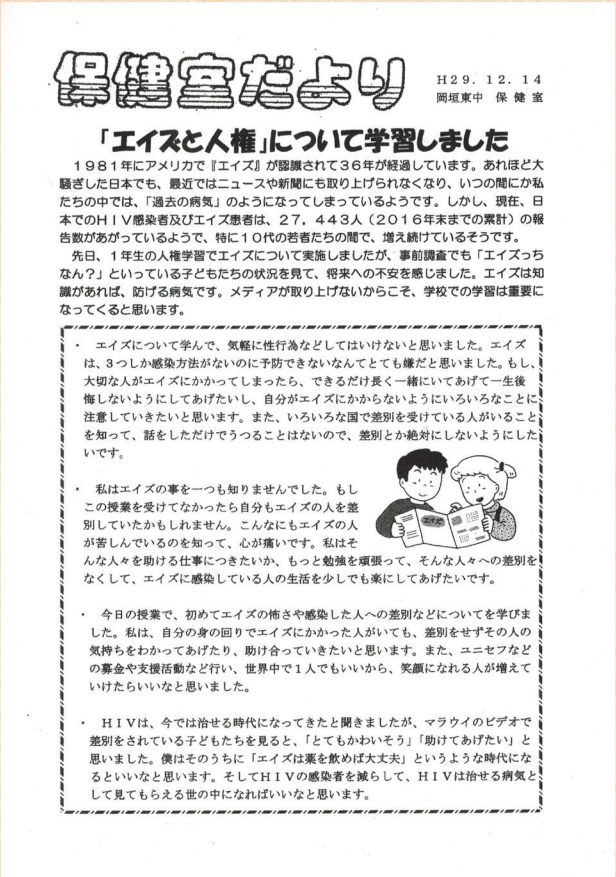
3年生の「10代の性について考えよう」の授業は男女別に行う

すると効果てきめん。「あ、白血球だ！」と生徒たちから一斉に声が上がったという。

またホワイトボードの裏表に資料を張って、途中でボードを裏返して活用したり、エイズ発症までの過程は、体の免疫（白血球の働き）が徐々に低下していく様子を手づくりの教材で説明したりと、生徒の興味・関心をひくように見せ方にも工夫を凝らす。

さらに板書についても「授業の流れが一目でわかるような板書計画をたてます」と白石養護教諭。

板書のどの位置に、何をどのくらいの大きさで書いて授業のポイントを伝えるか、最初に板書のラフコン



保健室だより

H29．12．14
岡垣東中　保健室

「エイズと人権」について学習しました

１９８１年にアメリカで『エイズ』が認識されて３６年が経過しています。あれほど大騒ぎした日本でも、最近ではニュースや新聞にも取り上げられなくなり、いつの間にか私たちの中では、「過去の病気」のようになってしまっているようです。しかし、現在、日本でのＨＩＶ感染者及びエイズ患者は、２７，４４３人（２０１６年末までの累計）の報告数があがっているようで、特に１０代の若者たちの間で、増え続けているそうです。

先日、１年生の人権学習でエイズについて実施しましたが、事前調査でも「エイズっちなん？」といっている子どもたちの状況を見て、将来への不安を感じました。エイズは知識があれば、防げる病気です。メディアが取り上げないからこそ、学校での学習は重要になってくると思います。

・　エイズについて学んで、気軽に性行為などしてはいけないと思いました。エイズは、３つしか感染方法がないのに予防できないなんてとても嫌だと思いました。もし、大切な人がエイズにかかってしまったら、できるだけ長く一緒にいてあげて一生後悔しないようにしてあげたいし、自分がエイズにかからないようにいろいろなことに注意していきたいと思います。また、いろいろな国で差別を受けている人がいることを知って、話をしただけでうつることはないので、差別とか絶対にしないようにしたいです。

・　私はエイズの事を一つも知りませんでした。もしこの授業を受けてなかったら自分もエイズの人を差別していたかもしれません。こんなにもエイズの人が苦しんでいるのを知って、心が痛いです。私はそんな人々を助ける仕事につきたいか、もっと勉強を頑張って、そんな人々への差別をなくして、エイズに感染している人の生活を少しでも楽にしてあげたいです。

・　今日の授業で、初めてエイズの怖さや感染した人への差別などについてを学びました。私は、自分の身の回りでエイズにかかった人がいても、差別をせずその人の気持ちをわかってあげたり、助け合っていきたいと思います。また、ユニセフなどの募金や支援活動など行い、世界中で１人でもいいから、笑顔になれる人が増えていけたらいいなと思いました。

・　ＨＩＶは、今では治せる時代になってきたと聞きましたが、マラウイのビデオで差別をされている子どもたちを見ると、「とてもかわいそう」「助けてあげたい」と思いました。僕はそのうちに「エイズは薬を飲めば大丈夫」というような時代になるといいなと思います。そしてＨＩＶの感染者を減らして、ＨＩＶは治せる病気として見てもらえる世の中になればいいなと思います。

授業後は「保健室だより」に生徒の感想を掲載して保護者に伝える

テをつくって内容を練る。次に実際に板書をして写真を撮り、その写真を見ながら生徒の立場になって再度内容を検討するなど、入念な準備をして授業にのぞむという。

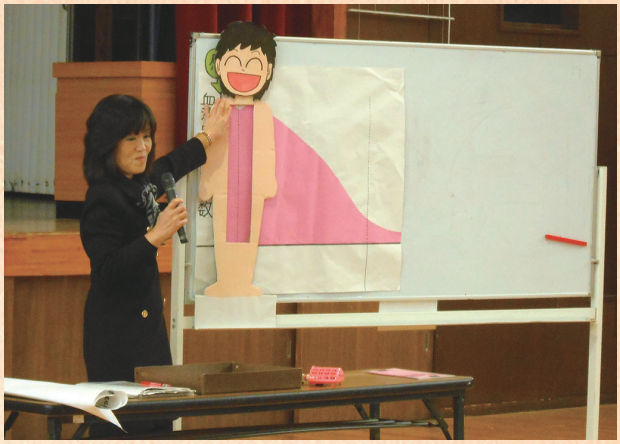
「実は、授業中に生徒にあくびされるのが嫌なんです」と白石養護教諭。

だから、眠そうな子どもがいたら、パッと切り替えて声のトーンを落としてみたり、『みんなちょっと、これ見て見て！』と用意した教材を見せたり。授業にメリハリをつけて子どもをあきさせないように心がけているという。

「性の知識教育」で終わらせないために

白石養護教諭がもうひとつこだわっているのが、性教育に対する姿勢だ。「単に性の知識教育で終わらせてしまうのではなく、性教育を通して生きることの大切さや命の尊さを考え、感じさせることができるようにしたい。ですから必ず授業の中に『心』の部分を入れたいと思っています」と語る。

たとえば１年生の「生命誕生」では、生命誕生の神秘性や生命がもつ力強さにスポットをあてて話したう



手作りの教材でエイズ発症までの過程を解説。人物の絵をスライドさせながら、免疫の低下を説明。人物の絵は、最初は元気そうだがエイズを発症するとつらそうな顔に変化する

えで、多くの人に支えられて誕生した自他の生命を大切にすることを生徒たちに伝える。

また、授業後は生徒の感想と学年通信を保護者に渡し、その後保護者には「子どもたちへのエール」と自分の子どもへ手紙を書いていただくようにお願いする。その手紙を２年間保管し、３年生の「輝いて生きる」授業で、１年生のときに保護者に書いてもらった手紙を渡すのだという。

「受験を控えた３年生の12月は、自分の進路に悩んだり不安を抱いたりする時期でもあります。そんなときに、思いがけなく２年前に保護者が自分宛に書いてくれた手紙を読みます。驚きとうれしさで照れくさそうに読んだり、涙を流す子どももいました」(白石養護教諭)。

新たな広がりと連携

昨年は岡垣東中学校では初めてLGBTを学ぶ授業に取り組んだ。

「私と担任の先生たちと、ゼロから授業をつくりあげていきました。試行錯誤の連続でしたし、不安でしたが生徒たちの反応がとてもよかったのです。こんなふうにして、教職員みんなで性教育をつくりあげていくのが私の理想です」と白石養護教諭は語る。

また昨年は、岡垣町の養護部会で小・中学校７校（小学校５校、中学校２校）が連携して性教育に取り組む試みもスタートしたという。

性に関する情報が氾濫し、子どもをとりまく環境の変化が著しい昨今、小学校と中学校の連携で、また教職員全体で取り組む性教育の形が広がってほしいと思う。

（取材・文　中出三重／エム・シー・プレス）

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

ひだまり保育園
おとな組（全３巻）

坂井恵理著
双葉社
定価 650 円＋税（第１巻）
定価 690 円＋税（第２巻）
定価 730 円＋税（第３巻）

“おとな組”の私たちの現実

「私たち 愛とか そんなふんわりしたものだけで 育児してないよね」――『ひだまり保育園』を取り巻く“おとな”たちを描いた本書には、現代の子育てのリアルが溢れている。

育児と家事の一切を妻が担うワンオペ育児、朝晩にバイトをかけもちするシングルマザー、10 代での出産と 40 代での高齢出産、「保育園落ちた」自営業、育児休暇の取得を上司に渋られる夫……。こうした“親”であるおとなたちの生活に、夫婦のセックスレス、不倫、子どもの死、保育園への「脅迫」書き込み、子役オーディション、児童ポルノサイトなど、性や生をめぐる問題が押し寄せる。

子育ては、子どもを育てることではない。この社会のなかで生きることであり、子どもをめぐる事柄は“おとな”の事情にほかならない。

子育ては「愛情だけではムリで 愛情抜きでもムリ」なもの。それにも関わらず、夫も、職場も、社会も、母親による育児をアテにしすぎている。子どもはかわいい。ひとつひとつの育児が難しわけでもない。でも、やることが多すぎる。一人でやれることではない！でも、そうした母親の本音を「察して」欲しいと期待してしまうこと自体、女性が「常にダンナのことを察してあげちゃってる」というジェンダーの罠にハマっているのだ、と登場人物たちは気づいていく。役に立たない男たちを吊るし上げるのでもなく、無慈悲な世の中を糾弾するのでもなく、本書が問い続けるのは、社会の隅々にはびこるジェンダーだ。

『ひだまり保育園』に勤めるゲイの男性保育士は、女性カップルとの間に子どもをもうけた「パパたち」の一人でもある。そんな彼が葛藤するのは、自身のセクシュアリティを隠した「ウソまみれの話」をすることだけでもなければ、男児をもつ親に敬遠される恐れの理不尽さだけでもない。個性を尊重するといいながら「みんなで同じこと」をするのをよしとする、おとなの期待からはみ出さない子どもを求める保育園の価値や文化である。「あそこに 僕らの居場所はない」と語る保育士の苦悩は、セクシュアリティを超えて、ありのままで生きられない社会の問題を問うている。

虐待や性犯罪のシーンを描かずして、子どもに対する暴力について取り上げた作者の技量と熱意も圧巻。保育園のプール写真が児童ポルノサイトに転載されたことに対し、「かわいいから」「LGBT とかを差別しちゃダメなら ロリコンだって認められていいはずですよね？」という言い分に、ある母親は違和感を唱える。そこには、幼い子どもを「いいなり」にさせたい、「女より優位に立ちたい」という支配をめぐる願望があるのではないか。そうした自分の弱さを「まるごと受け止めてほしい」といって子どもを求めることは、性癖とは異なるものではないか、と。おとなたちは対話を重ねながら、セクシュアリティと暴力を取り巻く偏見や思い込みを解いていく。子どもたちのために、そして、かつて傷つけられた自分自身のために、おとなたちは、時に勇気をふるい言葉を紡いでいく。

各話完結のオムニバスだが、それぞれの家族の話が少しずつ絡み合い、ゆるやかなつながりが生み出されていくのも心地よい。立場や苦労を異にする人たちが視線や言葉を交わし、ときに互いの違いに衝撃や苛立ち、悲しみを覚えながらも、やがて同じ思いや傷つきがおとなたちの関係性を深めていく。

おとなと子どもが育ちゆくこの社会には、ジェンダーをめぐるさまざまな困難がある。「世の中も 私も手強い」――向き合うべきは自分の価値観と生き方。でも、その挑戦は、ひとりじゃない。“おとな組”が挑むべきチャレンジなのだ。

（大阪大学大学院准教授　野坂祐子）

JASE Information

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

10月19日(金)・20日(土)

第 59 回 日本母性衛生学会総会・学術集会

朱鷺の国から ～母性衛生のさらなる飛翔へ～

内　容

19日（金）

会長講演◉「胎児が母体の中で育つ不思議 ～妊娠と免疫の関わりなどを通して～」髙桑好一（新潟大学医歯学総合病院総合周産期母子医療センター教授）

教育講演◉「LGBT の基礎知識と医療の実際」中塚幹也（岡山大学大学院保健学研究科 教授・岡山大学ジェンダークリニック）

市民公開講座◉「子どもたちを性感染症から守ろう」齋藤益子（東京医療保健大学看護学研究科教授）ほか

20日（土）

シンポジウム◉「リプロダクティブ・ヘルス／ライツを考える」ほか

会　場　朱鷺メッセ　新潟コンベンションセンター（新潟市中央区万代島 6-1）

問い合わせ等

当日参加費 / 会員 12000 円、非会員 15000 円、学生 5000 円
運営事務局／株式会社アド・メディック内
TEL 025-282-7035　FAX 025-282-7048
E-mail　bosei59@admedic.jp
http://admedic.jp/bosei59/

10月28日(日)14:00～16:00

「メディカル・ギャップ」プロジェクト講演in岡山

メディカル・ギャップについて考える

内　容

創立 20 周年記念シンポジウムで提唱した「メディカル・ギャップ」を広めるための講演会

講演１◉「20 周年記念シンポジウム報告」
早乙女智子（一般社団法人性と健康を考える女性専門家の会会長）

講演２◉「メディカル・ギャップ (Medical Gaps)」とは
林 夢都美（一般社団法人性と健康を考える女性専門家の会理事・メディカル・ギャップ：Medical Gaps 提唱者）

質疑応答＆ディスカッション
講演の中で生じた疑問・質問「これって、メディカルギャップ？」などについて、演者と参加者とで考える。

会　場　岡山中央病院 2F セミナールーム（岡山県岡山市北区伊島北町 6-3）

問い合わせ等

参加費／会員 500 円　一般 1000 円　学生 500 円（学生証提示）
申込方法／氏名・所属・連絡先を明記の上、「一般社団法人性と健康を考える女性専門家の会」事務局宛にメールまたは FAX で
〒 104-0045 東京都中央区築地 2-12-10　築地 MF ビル 26 号館 5F
一般社団法人性と健康を考える女性専門家の会事務局
TEL 03-5565-3588　FAX 03-5565-4914
E-mail　pwcsh@ellesnet.co.jp
https://kokucheese.com/event/index/532444/

11 月3日（土・祝日）13：00 ～ 16：30

東京HIV と性の教育セミナー2018 ／東京性教育研修セミナー2018

HIV と性の教育　UPDATE ！

いまどきのエイズ・性感染事情と新たな取り組み

内　容　文部科学省がなんと 17 年ぶりに「教職員のための指導の手引き」を改訂しました！

プログラム１　性教育の UPDATE ～それぞれの立場から
◉改訂委員の立場から――池上千寿子
改訂の背景、改訂のポイントと課題―教育現場では何をいかに UPDATE すればよいのか？
◉当事者・外部講師の立場から―加藤力也
子どもたちに伝えたいこと――ゲイ、HIV 陽性者として子どもたちに語った経験から
◉支援者の立場から―生島　嗣
学校教育の落とし穴、LGBT の性の健康――性の健康の啓発と調査活動の現場から見えてくる現状と課題

プログラム２　グループワーク～「手引き」の活用と工夫について意見交換

会　場　日本性教育協会セミナールーム（東京都文京区小石川 2-3-23　春日尚学ビル B 1）

参加費・問合せ先等　主　催：特定非営利活動法人ぷれいす東京　協　賛：日本性教育協会
参加費：1000 円（「教職員のための指導の手引き～ UPDATE ！ エイズ・性感染症」付き）・定員 30 名
対　象：教育現場で性教育／保健教育を実践している方、教職員、養護教諭、保健師、助産師など
申込み先：http://ptokyo.org/news/10029 のフォームよりお申込みください。問合せ先：E-mail　office@ptokyo.org　TEL03-3361-8964

東京性教育研修セミナー　2018

主催 一般財団法人日本児童教育振興財団内　日本性教育協会
「第８回青少年の性行動全国調査」委員会

●若者の性行動はさらに消極化へ!!

青少年の性行動の不活発化と多様性

～「第8回　青少年の性行動全国調査」からみえてくる若者像～

日本性教育協会（JASE）では、1974年よりほぼ６年おきに全国の青少年の性行動・性意識について調査してきた。今回は2017年度に行われた第８回調査の分析をもとに、性行動と性意識など青少年の性の実態の現状を報告する。そのなかで、この43年間における性行動の変容、生活環境の変化と交友関係のあり方、性的被害や性教育・性知識の受け止められ方などについて検討を行う。

また、日本とほぼ同一の質問紙で調査された中国の青少年の性行動・性意識の実態も報告する。

2018年 11月23日（金・祝日） 13：00～17：20（受付12:30）

基調講演　第８回　青少年の性行動全国調査の概要
片瀬　一男（東北学院大学教養学部教授）

講演①　青少年の性はどう変わってきたか
～性行動・意識の消極化と分極化
林　雄亮（武蔵大学社会学部准教授）

講演②　性行動と性規範・ジェンダー規範の関連性を探る
石川　由香里（活水女子大学健康生活学部教授）

講演③　青少年の性暴力～現状をとらえる方法
羽渕　一代（弘前大学人文社会科学部教授）

講演④　性教育はどう役に立っているのか～性に対する態度と知識
永田　夏来（兵庫教育大学大学院学校教育研究科講師）

特別講演　中国／北京・上海・広州の青少年の性意識と性行動調査
楊　雄（上海社会科学院社会学研究所所長）
裘　暁蘭（上海社会科学院社会学研究所研究員）

ディスカッション・Q&A
若者の性行動は日本・中国でどう変化してきたか？
座長・加藤　秀一（明治学院大学社会学部教授）＋上記７名

会　場　一ツ橋センタービル 12 階（東京都千代田区一ツ橋 2-4-6）
東京メトロ半蔵門線／都営新宿線／都営三田線「神保町」駅
A8 出口　徒歩１分

対　象　教育、保健、看護、医療関係者、学生、「性」「性教育」「セクソロジー」に関心のある方。

参加費　1,000 円（当日受付でお支払いください。資料代含む）

申　込　JASE ウェブサイトの申込ページ
http://www.jase.faje.or.jp/support/jasstokyo.html
のフォームからお申込みください。

定　員　100 名（先着順・予約制）

至 JR 水道橋駅　東口より徒歩 15 分

至竹橋駅　徒歩８分

JASE 一般財団法人日本児童教育振興財団内　日本性教育協会事務局
〒112-0002　東京都文京区小石川 2-3-23　春日尚学ビルＢ１
〈お問い合せ電話〉03-6801-9307

若者の性にかかわる行動、規範意識、情報源などが、
この６年間でどのように変容したかがわかる。
若者の性を理解するための必須の資料！

緊急出版 !!
全国調査による
最新のデータ

青少年の性行動

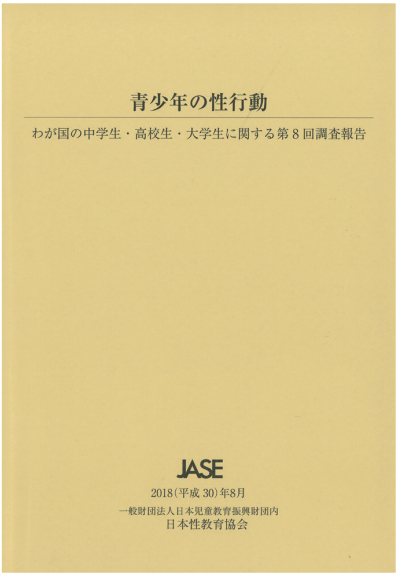
わが国の中学生・高校生・大学生に関する第８回調査報告

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第８回青少年の性行動全国調査」委員会

日本性教育協会では、1974 年に第１回調査を開始し、以来ほぼ６年ごとに「青少年の性行動全国調査」を行ってきました。日本の青少年の性行動や性意識の変化を全国規模で把握することができる貴重な調査データとして国内はもとより国際的にも認知されています。

このたび、2017 年６月から同年 12 月にかけて実施した「第８回青少年の性行動全国調査」の単純集計がまとまりましたので、一次報告として刊行しました。主要な結果「デート経験」「キス経験」「性交経験」などの解説と、全質問の中学生･高校生･大学生の男女別集計結果が掲載されています。

※なお、今回の調査に詳しい分析を加えた報告書「『若者の性』白書 第８回青少年の性行動全国調査報告（仮題）」につきましては、2019 年刊行予定です。



A4 判　80 ページ

頒価：1,000 円

送料は別途。詳しくは JASE ウェブサイトで確認してください。

JASE ウェブサイトよりお申し込みいただけます！

http://www.jase.faje.or.jp/pub/seikoudou8.html

※インターネット環境にない場合は、JASE(電話 03-6801-9307）までお問い合せください。

●本書に関するお問い合せにつきましては、下記までお願いいたします。

一般財団法人 日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
〒 112-0002 東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビル B１
TEL 03-6801-9307　　FAX 03-5800-0478
Mail info_jase@faje.or.jp　URL http://www.jase.faje.or.jp

JASE